

成果報告書

2026年 4月 1日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	教育普及活動助成		
研究および教育普及活動の期間	2025年 4月 ~ 2025年 9月		
フリガナ	コウエキザイダンホウジン ネリマクブンカシンコウキョウカイ		
大学（研究室等）名 学会・博物館名	公益財団法人練馬区文化振興協会		
フリガナ	コガネイ ヤスシ	職名	
代表者名	小金井 靖	代表理事（副理事長）	
フリガナ	イトウ マサフ	職名	
担当者名	伊東 正伸	練馬区立美術館 館長	
所在地	〒176-0012 練馬区豊玉北6-3-1 練馬区役所北庁舎 6階		
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	アートマルシェ2025	
	【目的】	<p>「アートマルシェ2025」は、練馬区の都市空間と美術館をつなぐ教育普及活動として、鑑賞者とアーティスト、地元の人々のあいだに双方向のコミュニケーションを創出することを目的とします。</p> <p>インスタレーション作品展示事業では、「身体で感じる緑とアート展」と題して、5名のアーティスト、廣瀬智央、山口啓介＋カセットプラントファクトリー、白井晴幸、渡辺泰幸＋渡辺さよ、中村萌を招聘し、美術館のほか緑地、商店街や高架下などのまち空間を活かした作品展示を行うことで、より多くの人々にアートの魅力的な世界へ誘う演出を目指しました。</p> <p>パフォーマンス事業では、ダンサーたちがダンスを披露する「パフォーマンス in the art」と、「植物」をテーマに子どもたちと制作した小道具と振り付けで、商店街を練り歩く「ねりび・ボタニカル・パレード」を実施しました（協力：一般社団法人パフォーミングアーツ協会）。本事業は当館ではこれまで実施する機会の少なかったパフォーミングアーツを披露することにもなりました。</p>	
	【実施体制】	<p>公益財団法人練馬区文化振興協会は、練馬区民の文化の向上および振興のための事業・支援を目的に1982年9月に設立されました。2015年度より練馬区立美術館の指定管理者となり、管理運営を行っています。1985年に開館した練馬区立美術館は、日本近現代美術を中心とした7,000点を超えるコレクションを活用した展覧会のほか、美術講座やワークショップなどの教育普及事業を充実させてきました。この度、申請を行う「アートマルシェ2025」事業では、練馬区美術館再整備まちづくり担当課との共催により本事業の企画・運営に携わりました。</p>	
	【実施方法】	<p>「別紙1」の項目【実施方法】にある通り、「インスタレーション作品展示事業」「パフォーマンス事業」「広報」の3項目ごとにスケジュールを立てて実施しました。「インスタレーション作品展示事業」では、アーティストごとにまちなかの視察を経たのちに設置場所と作品を決定し、現代アート展として公開いたしました（展示期間：9月10日～9月28日）。</p> <p>「パフォーマンス事業」では、8月に事前振り付けのためのワークショップを行い、9月14日の当日に最終合わせをしたのち、本番に挑みました（本番：9月14日10時30分～11時30分）。</p> <p>そして上記2つの事業に合わせて、区報・チラシ・SNS・プレスリリースなどを通して「広報」を展開しました。</p>	
【成果と社会的効果】	<p>インスタレーション作品事業では、「五感で楽しめる」と「まちとつながる」ことを主眼に、5名の作家はそれぞれ作品を制作・展示しました。美術館や美術の森緑地だけでなく、商店街のショーウィンドウ、空き店舗などに展示の場を広げることで、街行く人々にも鑑賞の機会を提供することができました。パフォーマンス事業においては、ダンサーと子どもたちと協働による「ねりび・ボタニカル・パレード」において商店街を練り歩きました。以上を通じて、美術館を出て都市空間、生活空間へも作品の展示やパフォーマンスアートの場を広げたことで、鑑賞者とアーティスト、関係者のあいだに双方向のコミュニケーションの創出を達成することができました。</p>		
共同研究者等の有無	なし	あり（人数 名）	
助成金額	100 万円	主な用途	制作費・設営費

研究室名 学会・博物館名	公益財団法人練馬区文化振興協会
テーマ	アートマルシェ2025

【目的】

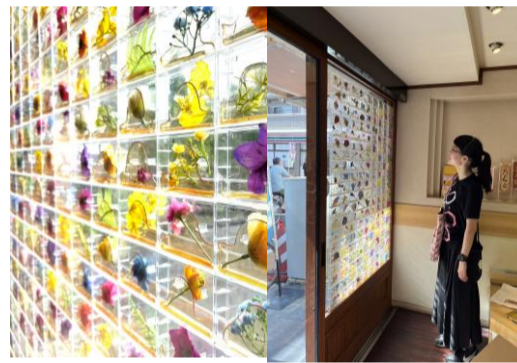
「アートマルシェ2025」は練馬区の都市空間と美術館をつなぐ教育普及活動として、鑑賞者とアーティスト、地元の人々のあいだに双方向のコミュニケーションを創出することを目的とします。

アートマルシェとは、練馬区立美術館（公益財団法人練馬区文化振興協会）と練馬区美術館再整備まちづくり担当課、貫井図書館の3者が合同して行う「まちと美術館の一体化」を目指す継続的な催し物です。2023年度に第1回アートマルシェ（2024年1月20日、21日）を開催し、第2回（2024年9月14日、15日）では美術館、図書館、近接する美術の森緑地を会場に、サンツ中村橋商店街による飲食物の出店、図書館による読み聞かせや古本頒布会、そして美術館によるワークショップのブース、ダンサーと子どもたちによるパフォーマンスなど、教育普及活動と地域連携を織り交ぜた活動を実施してきました。

「アートマルシェ2025」（2025年9月13日、14日）では、これまでのワークショップやパフォーマンス【図1】に加えて、インスタレーション作品の展示も行いました。アーティストには、廣瀬智央、山口啓介+カセットプラントファクトリー、白井晴幸、渡辺泰幸+渡辺さよ、中村萌を招聘し、美術館のロビーや展示室だけでなく、商店街のショーウィンドウ、空き店舗、緑地などの立地を活かして、視覚のみならず五感で体感できる作品を展示しました【図2】【図3】。これにより、「内」「外」との融合をはかり、まちと美術館をつなぐことを試みました。



【図1】「ねりび・ボタニカル・パレード」の様子



【図2】山口啓介+カセットプラントファクトリー
《散華樂》2025年 @練馬風月堂 本店



【図3】白井晴幸《Panorama #122 / Nakamura shi》2025年 @エミオ中村橋 外壁

【実施体制】

公益財団法人練馬区文化振興協会は、練馬区民の文化の向上および振興のための事業・支援を目的として、1982年9月に財団法人として設立された団体です。翌年の1983年より、練馬区立練馬文化センター開設に伴い、管理運営の委託を行って参りました。その後、2012年度に公益財団法人へ移行し、2014年度より練馬区立石神井ふるさと文化館、2015年度には練馬区立美術館の指定管理者となり、現在も管理運営を行っています。2011年度以降からはまた、行動計画の立案と実施・実現状況を4～5年単位で振り返ることを定め、PDCAサイクルに基づき活動目的の達成度を測定しています。

この度、助成金を申請した教育普及事業「アートマルシェ2025」では、申請者は練馬区美術館再整備まちづくり担当課との共催により本事業の企画・運営に携わりました。その他、共催の練馬区貫井図書館、さらにはサンツ中村橋商店街などの地域の人々と連携・協働しながら、「まちと一体となった美術館」を目指した空間づくりに励みました。

【実施方法】

インスタレーション作品展示事業

- 4月～6月：作品および展示場所の確定（山口作品の制作開始、～8月末日まで）
- 7月：アーティストとの打合せ+調整、リーフレットの作成
- 8月：アーティストとの最終調整+作品集荷など
- 9月：会場設営+作品設置（9月1日～9日）
- ：展示期間（9月10日～28日）
- ：撤去・作品返却など（9月29日～10月10日）

パフォーマンス事業

- 4月～6月：パフォーマンス事業内容の確定、打ち合わせ
- 7月：道路使用許可の申請
- 8月：事前ワークショップ
- 9月：本番「パフォーマンス in the art」（9月13日）、「ねりび・ボタニカル・パレード」（9月14日）

広報

- 6月：チラシの配布、美術館HP・SNSでの告知
- 7月：プレスリリースの配信（フリーペーパー・ウェブ記事を中心に13件の紙面に掲載）
- 8月：練馬区公式X・LINE等での告知
- 9月：練馬区報、練馬JCOM（当日の取材）

研究室名・博物館名	公益財団法人練馬区文化振興協会
テーマ	アートマルシェ2025

【研究・教育普及活動の成果】

インスタレーション作品展示事業

「身体で感じる緑とアート展」では、「五感で楽しめる」ことと「まちとつながる」ことの2点に重きを置きました。そのため、従来の展覧会のように動線を重視した厳密な章立てを設けることはせず、展示場所である美術館内とまちなかを巡ることができるような構成を採用しました。

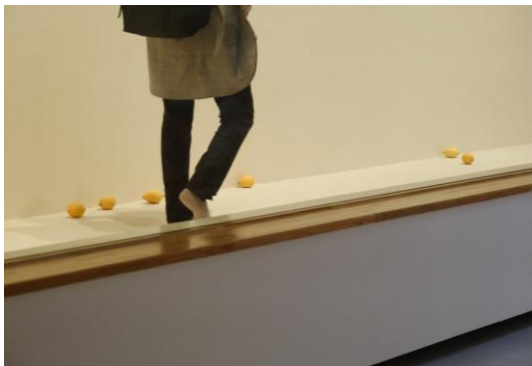
廣瀬智央は、美術館の展示室にて清涼感溢れるレモンやミントの香りを充満させたインスタレーション作品を披露しました。とりわけ本物のレモンが散らばった展示ケース内を歩くことのできる参加型作品《レモン・パッセージ》【図4】は、リニューアルを目前に控えたこの時期だからこそ実現した作品の一つです。鑑賞者からも、「普段は展示ケース内に入ることも展示室内でくつろぐこともできないので、わくわくした貴重な機会になりました」、「五感を使って鑑賞するというのは面白い」などのコメントを得られ、作品の狙いを伝えることができました。

山口啓介＋カセットプラントファクトリーは、練馬風月堂のガラス窓と美術館ロビーのガラス壁の一面に、ボランティアと当館スタッフでカセットケースに草花を1本ずつ封入した「カセットプラント」約1万2,000個を《散華樂》として展示しました。《散華樂》は仏教用語からなり、「諸仏を境内に招き入れるために蓮の花弁を撒く儀式」に由来し、山口が当館の40周年を記念して名付けました。

美術館と中村橋のまちの双方に彫刻作品を披露したのは中村萌です。彼女のイマジナリーフレンドとして誕生した不思議な生き物たちは、美術館ロビーと植え込みのほか、マルイチ質店 中村橋店のショーウィンドウ、旧観賞魚店前にも展示をしました【図5】。今回の展示にあたり、中村自身も「見慣れた風景が少し違って見えたり、ふと立ち止まって周囲の緑に目を向けたり、そんな揺らぎのきっかけになったら嬉しいです」と発言をしていますが、こうした場所への展示は、中村橋駅や商店街に向かう通行人の皆さんが美術作品と出会う機会を提供できました。

渡辺泰幸＋渡辺さよのユニットは、美術の森緑地に触れることで音を楽しむことができる《繋ぐ音》を発表しました。本作品は鉄の支柱に陶製の円錐の音具を取り付けたものを、緑地の植え込みに約150本を植えるという作品です。インスタレーションとしても参加型の作品というだけでなく、白い陶土の円錐が植栽の緑に映える、視覚的にも涼やかな緑地の風景を演出できました【図6】。

白井晴幸は、自作のカメラで撮り下ろした中村橋の風景を発表しました。白井の作品はスリット露光により、ストライプのレイヤーのなかに歪んだ人物像が浮かび上がります。本展では、エミオ中村橋の外壁、街灯フラッグ、美術の森緑地の看板など、まちなかを彩るように展開させました。とりわけエミオの外壁一面に貼られた《Panorama #122 / Nakamurabashi》は、不可思議に歪んだ等身大の人物と、実際に往来する人々が混ざりあう、まさにまちに溶け込むかのような空間が実現しました。



【図4】廣瀬智央《レモン・パッセージ》2025年 @練馬区立美術館



【図5】中村萌《Inside Us》2021年 @旧観賞魚店前



【図6】渡辺泰幸＋渡辺さよ《繋ぐ音》@美術の森緑地 植え込み

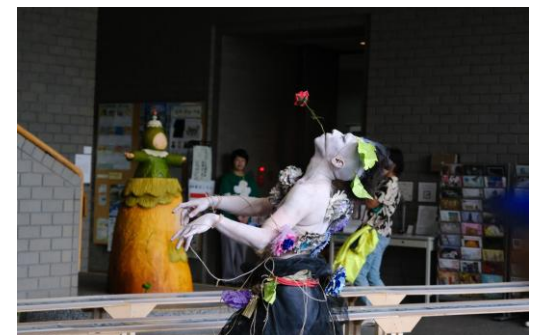
パフォーマンス事業

「ねりび・ボタニカル・パレード」は、プロのダンサーと小学生の子どもたちで植物の仮装グッズと振り付けを考え、「美術館～サンツ中村橋商店街～貫商會」までを練り歩くパフォーマンスです【図7】【図8】。ボタニカル（植物）をテーマに、春夏秋冬を表す振り付けや小道具を制作し、昨年度よりも大所帯の総勢46名で商店街を練り歩きました。

「パフォーマンス in the art」では、これまで美術作品の展示を中心としてきた当館にとって、舞踏という動きのある美術を紹介する機会となりました【図9】。以上を通じて、美術館を出て都市空間、生活空間へも作品の展示やパフォーマンスアートの場を広げたことで、鑑賞者とアーティスト、関係者のあいだに双方向のコミュニケーションの創出を達成することができました。



【図7】および【図8】「ねりび・ボタニカル・パレード」の様子



【図9】「パフォーマンス in the art」の様子

研究室名 学会・博物館名	公益財団法人練馬区文化振興協会
テーマ	アートマルシェ2025

【今後の成果の活用と活動の展開について】

今回の「アートマルシェ2025」では、「インスタレーション作品展示事業」と「パフォーマンス事業」を通じて、美術館から都市空間、生活空間へも作品の展示やパフォーマンスアートの場を拡張しました。それにより、鑑賞者とアーティスト、地域の人々のあいだに広範なコミュニケーションを創出することができました。とりわけ、「インスタレーション作品展示事業」では、商店街や駅前などのまちなかに展示した作品を多くの方に見ていただくことができ【図10】【図11】【図12】、参加型のインスタレーション作品では、鑑賞者同士のコミュニケーションを喚起することができました【図13】【図14】。



【図10】中村萌《Inside Us》2021-2025年 @ マルイチ質店 中村橋店 ショーウィンドウ



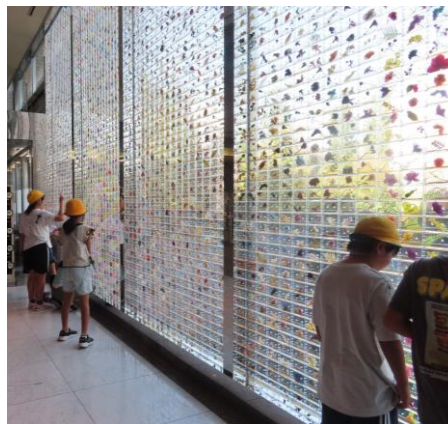
【図11】エミオ中村橋外壁の白井晴幸作品を鑑賞する歩行者



【図12】白井晴幸《Rays of the View #115》2025年 @ 駅前通りフラッグ



【図13】廣瀬智央《クールダウン・練馬》2025年 @ 練馬区立美術館



【図14】美術館ロビーガラス壁の山口啓介作品を鑑賞する子ども

これまで、練馬区立美術館（公益財団法人練馬区文化振興協会）は展覧会をはじめ、教育普及事業のほとんどを館内で完結させていましたが、本事業により近接する緑地や商店街へとアートを展開させる新たな取り組みに挑戦することができました。今回の成果を踏まえて、来年度以降もこの展示事業をさらに充実したものへと発展させていき、アートでまちと美術館をシームレスにつなぐ展示空間の可能性を摸索していきたいと思えます。